

大通公園を望む窓辺から

札幌競馬場での思い出

常任理事 水谷 匡宏

今年の夏、新装間もない札幌競馬場に向き、ホースレースを観戦する機会に恵まれた。公式発表では4万人をはるかに超え、歴代2位の来場者数とのことであった。館内には中年の競馬ファン以外にも若い女性や、子どもたちが多く、一昔と違い明るいイメージに変貌した。またこの日は、今年10月に競馬界最高峰の凱旋門賞に出走したゴールドシップとハープスターとの前哨戦が予定されていた。柔軟な下半身とダイナミック走行のゴールドシップに対し、3才馬でありながらすでに切れ味抜群のハープスターとの一騎打ちは競馬ファンならずとも注目の一戦であった。

レースが終わった後もしばらくの間興奮は冷めやまなかったが、自然と私の足は2Fの開放テラスへと向かっていた。

そこは競馬場の中庭まで見渡せる眺望の良い評判の場所であった。何気なく中庭を眺めていると、急に40年前の自分を思い出していた。当時北大の学生であった私は医学部の準硬式野球部に所属していた。野球部員は放課後になると毎日のように学舎からほど近い競馬場の練習場に向け、ひばりが天高くさえざる広大な農場のあぜ道や沿道をランニングした。暗くなるまでたっぷり練習した後は数人の仲間とともに何も気にせず侵入禁止のダートコースを横断して帰った。私たちの残した足跡が翌日のレースにどう支障をきたしたかは定かではなかった。しかし、ある日数人の守衛さんが来て、ダートコースを無断で横断するのは君たち以外見当たらないので、即刻やめるようきつく叱られた。まさかこの件で競馬関係者に多大な迷惑をかけていたとは。しかし反省と練習の成果が実り、翌年からの東医体で二連覇を成し遂げた。今ではすでに野球場はなく、その跡地にはファミリーランドが誕生し変貌をとげた。この日は淡い思い出に酔いしれた一日となった。



一般財団法人 苫小牧保健センターについて

理事 沖 一郎

苫小牧保健センターは市町村が運営する保健センターと異なり、昭和53年に苫小牧市医師会と苫小牧市が共同出損により開設されました。目的は市民の健康増進、保持のための健診事業、苫小牧市および周辺に立地した企業の従業員の健診および産業医活動などと、もう一つの柱は休日夜間急病センターの運営です。健診事業は住民健康診断、および企業健診が中心です。

当初の利用者は年4,000人程度でしたが、現在は年60,000人を超えているため新しい施設を建設中です。新しい施設は企業健診、住民健診だけでなく保健師、栄養士、健康運動指導士などによるヘルスプロモーション事業により、市民一人ひとりが健康を意識し健康作りのための拠点となる予定です。そのために現行行っている健診精度の充実を図り、疾病の早期発見と健康寿命の延伸のため、多くの市民が受診しやすい環境づくりと健診の受診率向上の努力を行っています。建設場所は平成21年に移設新築した休日夜間救急センターの隣接地で、健診事業と急病部門の一体運営を目指したものです。

医師会が財団法人を設立して健診事業や救急医療に関わっているため、医師会員との情報の共有や救急センターの円滑な運営に役立っています。

27年4月にオープン予定ですが愛称はハスカッププラザとして市民の健康づくりの中心として、さらにはこれから始まる超高齢化時代の地域包括医療の中心としてさまざまな事業の参入をしていく予定です。

